

佐多稲子の『分身』を読む：「混血現象」をめぐって

趙, 科
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程2年

<https://doi.org/10.15017/1787568>

出版情報：九大日文. 26, pp.94-102, 2015-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

佐多稲子の『分身』を読む

——「混血現象」をめぐる——

趙科チウコ

一、はじめに

佐多稲子の「分身」は、『文藝春秋』一九三九年七月号に発表された「分身」と、同年十月に『文藝』に発表された「昨日と今日」とあわせ若干の加筆をくわえて『青春陰影』（春陽堂一九三九年一月）に収録された。

この作品は日本人の母親お杉と、中国人留学生であった父親の間に生を受けた「混血児」レンの生活を心の内側から書いたものである。周囲の人に対して自らの出自を打ち明けることが出来ず、いつしか「人前に隠れているも一人の自分」（＝分身）を感じるようになるレンの苦悩する姿を描いている。

作品発表の翌年一九四〇年には、佐多稲子の植民地旅行と戦地訪問が始まり、これ以後、戦後にいたるまで、植民地の問題は佐多の重要なモチーフとなる。一九四〇年六月から一九四三年四月までの、複数回にわたる植民地旅行と戦地慰問^①の経験に基づいて数多くの作品を書いた佐多にとって、この小説は、彼女が植民地へ意識を向けるきっかけとなった作品であると思われる。また、初めて「混血児」を主人公としたという点にお

いても、戦時中の佐多を論じる際に、見落とすことの出来ない作品であると考えられる。

同作品については、すでに拙稿『分身』の改作について——作品の中の「私」を中心に^②において、執筆当時の心理的動揺がどのように作品中に反映されているか、エッセイなどの他作品との比較を行いながら考察した。本稿では、「混血児」を取り上げている点に着目し、当時の社会背景からこの作品へのアプローチを行ってみたい。

二、先行研究と問題設定

「分身」の発表当時、文壇での評価は「女主人公の苦しみが明晰に描き切れていない」^③というような批判的なものが多かった。この中で、作品発表後翌年に、中野重治が「分身」について「ただかういふことだけはつけ加えて置いていいかも知れぬと思ふのは、元前の日支事變とささやかな「分身」一篇は、日支の混血児、特に女の混血児を主人公にしてその日本生活を描くものである。（中略）「分身」の主人公レンは、その血のなかに日支二つの民族を持つてゐる。そしてそのことが、女の独立活動に對して持つ戸籍謄本などといふものの力の中へ生きものとして立ちあらはれて来るのである。日支両民族の提携は実現されるに違ひなく、東洋の平和は確立されるに違ひないが、そのよるこばしい日に、それよりもずっと以前に、かういふ一人の女のゐたといふことが顧みられていいかも知れない。ある

条件の下では、日支の結合を自分の血のなかに持つてゐた女さへ、かういふ生き方、むしろ生き方のゆがみを持たねばならなかつたといふことができる」⁽⁴⁾と、レンの苦悩には日支事変が大きく影を落としているという認識を示していることは注目に値する。また、佐多自身も「私が「分身」のレンを描くのは、当時の日華事変を強く意識してのことであつた」⁽⁵⁾と語つてゐる。

一九三四年にプロレタリア同盟が解散して、組織的運動そのものが壊滅に追い込まれた状況であつた。こうした弾圧をうけて転向した作家も少なくはなかつた。当時、プロレタリア作家として文学活動が続けてきた佐多も、以降の執筆活動をどのように続けていくかを考えなければならぬ事態に追い込まれてゐた。「当時の日華事変を強く意識」して書いたという「分身」に、当時の佐多の心境はどのように投影されているのかという問題については、確認できた限り、先行論ではまだ言及されていない。

この作品については、佐多自身も随筆などで言及している。「分身」の発表二ヶ月後、佐多は雑誌『文藝』（一九三九年十二月）に「旧友への手紙」を発表した。これは「驢馬」時代から親交の厚かつた堀辰雄に宛てたものである。

今年「分身」という小説に少し自分をたゞき込んでみました。「文藝春秋」の「分身」と、「文藝」の「昨日と今日」をまとめて直し、少し気が落ち着きました。春陽堂か

ら出ます本に入れましたので、もしお暇がありましたらお読みいただければ嬉しうございます。私の性格のなかにある一種のニヒリズム、そんなものをたゞいてみたかつたのですが、これは私のいはゞ隠し子ですから。（傍線筆者、以下同）

また、一九七八年一月の随筆「時と人と私のこと」⁽³⁾——くぐり抜けと狎れ合いと」⁽⁶⁾の中でも、「分身」では、「虚無的になる心境を、私はレンに附託したようである」と回想している。

一九三九年当時の佐多が抱えていたという「私の性格にある一種のニヒリズム」は「私のいはゞ隠し子」だという、「分身」の中にどのように描かれているだろうか。

本稿では主人公レンの「混血児」という出自に焦点を当て、「混血」表象をめぐる、戦略的に利用される「混血児」の描かれ方から、作品の考察を行う。

三、社会背景——「混血化現象」

「分身」の作中時間は、一九三七年七月七日の盧溝橋事件に端を発する日中戦争が開始される時期にあたる。この時レンは二十三歳であり、彼女が生まれたのは一九一四年（大正三年）ごろだと推定できる。レンの父親はこの時期に日本に留学していた公費留学生であつた。

一八九六年、清から十三名留学生が派遣され、一九〇五年に留学生の人数は最高潮に達する⁽⁷⁾。中村みどりが「当時留学生の数に応じて多くの日本人妻がいた事を今日に伝えている。晩清く民国初期に来日した留学生は身元が良く手厚い官費の収入があり、裕福な留学生と日本の庶民の娘の結婚はゴシップ的となった。」⁽⁸⁾と論じているように、当時留学生と日本人女性の結婚は決してめずらしいことではなかった。レンの父親は第一期（一八九六く一九三七）⁽⁹⁾の留学生であり、下宿をしている家の娘と恋愛関係になる。

一九一四年、第一次世界大戦が起こると、日本はドイツに宣戦して、山東半島の膠州湾を占領した。さらに、一九一五年一月には、日本は二十一か条の要求を突きつけた。これらの事件をきっかけに、中国では日貨排斥がおこり、この間、憤慨した留日学生らは大挙して帰国した。レンの母親お杉も夫とともに、上海に渡り、そこでレンと弟亮を産む。レンが三つになるときに、父親は「少し奥地」⁽¹⁰⁾へ転任することになり、お杉は「それ以上は男についてゆけないものがあつた」ために、レンと亮を連れて帰国する。

佐多はレンについて、この人物の「モデルは実在した」⁽¹¹⁾と認めているが、それ以上の具体的な説明は行なっていない。「日華事変」を意識して書かれたという「分身」の設定には、当時の社会背景が意識的に反映されている。よって、レンの「混血児」という設定についても、当時の社会背景を抜きにして考えることはできないだろう。

「混血児」については、すでに波平勇夫による詳細な論考がある。波平は「混血児の研究」⁽¹²⁾において、「混血児はどのような社会体制から出ているか、あるいはその社会体制はどのような構造を有し彼らを位置づけようとしている」かに基づいて、その「特質、諸問題」は理解されなければならないと指摘し、「人類の歴史に於いて、混血化は少しずつではあるが常に進行しているが、この混血化現象は社会的にみて無規定な自然現象、あるいは自然の融合としてではなく、社会体制とのかわり合いによって把握されねばならない」と述べている。では、具体的にどのような状況下で「混血化」が現象するとされているか。

混血化現象は、社会体制における権力配分の従属変数として捉えられる。いつてみれば、それは支配と被支配の権力構造から結果している。その具体例をわが国から見てもよい。（中略）わが国における混血化現象は奈良、平安時代にまでさかのぼる。即ち、大陸における先進文化を吸収するために、わが国は大陸から文化人を招聘し、邦人との結婚を許して、彼らの帰化、土着化を奨励した。この場合、権力的には策動であったけれども、実際には相手（帰化人）に対して頭を下げたわけであり、その証拠に彼らの社会的地位が高かったこと、混血児が各方面で活躍したことなどを考えれば、大陸文化に支配され、その支配従属関係から混血化現象は規定されるわけである。⁽¹³⁾

「混血」化は権力構造の編成と密接な関係があり、それが外部からの侵略によってもたらされるとときに、旧体制への脅威・変革となりうる、ということができらるだろう。

波平は奈良、平安時代の「混血」を例にとつて論じているが、近代においても、特に戦争の時代にその傾向は見られる。日本は植民地支配、同化を図るために「混血」を利用し、支配と「皇民化」の目的を実現させている。このような社会状況下で、「混血化」が現象としていったのである。

「日本は一八九五年に日清戦争に勝利し、清国から台湾を獲得した。これを皮切りに一九〇五年にロシアから南樺太を獲得するとともに、清国からの租借地として関東州を引き継いだ。一九一九年には韓国を日本へ合併した。又、一九二〇年には国際連盟から南洋群島に対する委任統治を受任した。相次ぐ版図の拡大によって日本はアジアにおける「帝国」を築くに至った。帝国の領域内にある多元的な住民を統治するためには、「国民」としての一体的意識を涵養し、その下で管理統治するメカニズムが要請される」⁽⁴⁾。台湾と朝鮮では、「内台結婚」と「内鮮結婚」が奨励され、一九三九年に「満洲開拓政策基本要綱」が閣議決定された。こうした日本の対外政策の拡大に伴い、「混血」は「五族共和」というスローガンのもとに、「東亜協同体」を実現させるための手段となった。そして、これを受けて当時、混合民族論が優勢となつてゐる。たとえば、伊地知進の「興亜的混血論」⁽⁵⁾では、生物は進化のために常に外部からの新しい

「輸血」を必要とし、同じく「日本民族の発展飛躍の為に、新しい混血を必要とする」という観点を示している。さらに、「日本人の優秀性」は、「七、八種の人種の血液が混合されていること」に根拠があり、「この血液こそは、あらゆる白人種文化黄色人種文化と雖も吸収するものであり、あらゆる寒帯文化熱帯文化までも葉籠中のもの為すだけの原動力となるもの」であるという。これを背景に、「混血児」がクローズアップされ、文学作品に頻繁に取り上げられていくのである。一九三七年七月、『中央公論』に湯浅克衛の短篇小説「棗」が掲載された。一九三八年三月に佐藤春夫の「アジアの子」⁽⁶⁾が『日本評論』に発表された。「分身」と同じく一九三九年に金史良が「光の中に」を『文藝首都』十月号に発表し、石川淳が「白描」を『長篇文庫』三月号から九月号に発表している。

例えば、「棗」には以下のような記述がある。

太郎の母親は、東京の下宿屋の娘だった。下宿人で私立大学専門部に在籍していた金大吉が十七歳の彼女に求婚し、彼の卒業後、ふたりは朝鮮へと渡つて行く。玄界灘を越え朝鮮に到着した翌日、大吉は始めて本妻と三人の子どもがいることを打ち明ける。すでに妊娠していた彼女は大吉と分かれることも出来ず、結局「妾」として「混血」の息子を育てることになった。

(中略)

太郎にとつて「市場」とは、ゴム靴売りの父親の商売の

場であり、時には母親に隠れ、父とふたりで屋台の骨つき肉にかぶりついた思い出のある特別な場所である。(略)しかしある日、市場で父親と素麵を食べているところを小学校の級友に目撃され、「市場の子」、「金、太郎のお父さんは、ちよん鬻を結つてたぞ。ちよん鬻のヨボだぞ」と囁きたてられるように、「市場」は朝鮮人／被植民者の集う空間として設定されているのである。

小学校に通う日本人児童は、「普通学校の鮮童達」を「大和魂を持つとらん」と馬鹿にし、しばしば喧嘩をふっかける。⁽¹⁷⁾

「混血民族論」が優勢であつても、「混血化現象」が現れているとき、すでに支配従属関係が規定されているわけである。つまり、日本は支配地として、植民地は被支配地として規定されている。植民地同化政策を支えた「混血民族論」は、「混血を容認」し、「混血」推進による被支配民族の抹消を重要な要素と「し、劣等な被支配民族との「混血」によって、「劣等人種に優等人種の文明を体得させ同化」させるものであつた。当時の「混血論」に通底しているのは日本人の自明性である。すなわち「日本人」の存在が前提としてあり、「混血」なるものを他者として設定することによって、「純血」の日本人という枠組みが強化されるのである。

四、「混血児」の描かれ方

前節までで、「混血化表象」が民族問題に回収され、共同体を維持するために戦略的に利用されていることを確認してきた。そこで、佐多が「分身」において、「本来」のレンを日本人として認識している、という問題が浮上する。

当時の「混血児」を取扱う文学作品において、一つの重要な問題となると考えられるのが、「混血児」のメインの民族を作者がどのように認識しているか、ということである。なぜなら「混血児」が結局のところ「何人」であるのか、それをどのように強調するかということは、共同体を維持するための戦略の中で重要な意味を持っていると考えられるからである。その例として鄭成功の例を挙げる。

日本では早くも近松門左衛門の『国性爺合戦』において、その混血性が強調されていた。近松は、現実の鄭成功に対し、想像力をはばたかせて物語を構成し、物語の最後には主人公が韃靼軍を打ち破つて南京城を攻略するなど、史実と大きく異なる部分も少なくない(そのため鄭成功の本来の「国性爺」ではなく「国性爺」と記される)。特に日本という強調されたことについて、日本文学研究者の堤精二は以下のように書いている。

また、中国に渡る和藤内一行が神風の力をかりたり、「千里が竹」の虎退治には伊勢大神宮の護符によって威服させるなど、神国日本を強調し、唐土との対比において日本を

より高く標榜しようとする意図が読み取れる。これは次第に国家意識が高揚し始めた時代の風潮のあらわれであるとともに、本曲を特徴づける重要な性格と言いうるであろう。

(中略)

一方、中国の近現代文学で鄭成功はどのように描かれたのだろうか。全てを網羅するのは能力や紙幅の問題もあり不可能だが、例を挙げると、まず日中戦争が勃発し、孤島となった上海の租界で阿英(銭香邨)が魏如海の筆名で演劇の脚本『海国英雄——鄭成功』を書いている。ここでは鄭成功が清に降った父と毅然として決別し、清に抵抗する姿が描かれていて、歴史劇の中に抗日のメッセージを忍び込ませたことは明らかで、⁽¹⁸⁾ここには日本人の母も登場せず、また彼が混血であることも言及されない。

上記の引用からは、鄭成功の人物像、鄭成功を巡る言説は日本と中国では全く違う意味が付与されていたことがわかる。

日本では、はじめて「国性爺——鄭成功」という人物像が一七一五年近松門左衛門の新作浄瑠璃『国性爺合戦』で登場した。明末の遺臣である父鄭芝龍と日本人の平戸の足軽田川七左衛門の娘との間に生まれた、日本名田川福松という実在の人物をモデルにした浄瑠璃である。後に明滅亡後、父とともに清に対する抵抗闘争を展開し、父が清に降伏した後も、台湾を拠点にしながら、北の大陸に対し、南部の海洋沿岸地域からの反清闘争を継続したのが鄭成功であった。彼は「混血児」であるが、特

に「日本人」の部分が強調されている。日本人の血を引く「和藤内」すなわち鄭成功は「日本魂」を象徴する人物として描かれている。また、太平洋戦争期には、日本の台湾に対する植民地支配を正統化する手段として鄭成功の物語が再生産され、機能するのである。「台湾の歴史は鄭成功の歴史なり、其の事蹟を伝へて大に成功の切を世界に伝へ、并せて日本の光を顕はさん」という言葉や、「我邦人の腹に生まれ、孤忠能く明祀を保ちたる国姓爺鄭成功の像」というイメージが、「強化を布く」手段として用いられている。⁽¹⁹⁾

中国では、明の遺臣である鄭成功は、清政府に当初「乱臣賊子」と呼ばれた。しかし、一九八七年に、当時の明治政府が台湾に出兵した牡丹社事件によって、清政府は「台湾は国家海防拠点」であるとして、その重要性を意識するようになった。台湾の支配を押し進め、台湾民族を急速に漢化するにあたって、清政府は鄭成功を「忠義典範」と呼び、大きく評価を変えた。

清の逆賊であることより、明に最後まで「忠節」を尽くしたという面が強調されたのである。後の日中戦争時には、清に降った父と毅然として決別し、清に抵抗する鄭成功の姿に、抗日のメッセージが重ねられるようになり、「民族英雄」というイメージが定着していった。中国では、鄭成功のイメージも時勢によって変わりつつある。しかし、鄭成功の「日本人の血を引く」という事実は当初から無視されている傾向がある。⁽²⁰⁾

上記からみると、戦略的に利用される「混血」は時代、立場によって、描かれ方が違ってくる。

「分身」において、作者は中国で生まれ、日本で育てられた「混血児」レンを描くとき、彼女の本質を日本人に設定している。「社会背景——混血現象」で述べたように、「混血政策」は共同体を維持するための手段であった。「分身」での設定は、当時の体制に利用される「混血政策」に対する、佐多の黙認といえるのではないだろうか。

五、終わりに

これまで見てきたように、太平洋戦争期には「混血政策」が植民地支配のために推進されるなかで、「混血児」をめぐる言説も再生産され、政策と相乗的に作用していた。「混血児」の「何人」としての側面が強調されるかは、支配戦略の中で重要な意味を持っているといえる。

「分身」のレンについていえば、父親は中国人であり、三歳までは中国で育てられた。父系血統主義優先⁽²⁾の当時では、父親から自分の身分を認識するのが一般的である。三歳からは日本人の母親とともに日本で生活してきたのだとしても、自分の中国人としての側面を受け入れることができず苦悩するレンの姿には、疑問を持たざるを得ない。

二〇一三年、佐多稲子研究会によって、『凜として立つ』⁽²⁾という文学アルバムが出版された。その中では一九三六年から一九四〇年にかけてが、厳しい言論統制の中、黙り込むという形ではなく文学活動を続けてきた時期、佐多にとつての「抵抗の

時代」⁽²³⁾であるとされている。また、小林美恵子は

昭和十四年といえば、すでにプロレタリア文学運動も崩壊し、言論統制も厳しくなり、宮本百合子を残してすべての作家は、黙りこむか転向するかの形で時を過ごしたものと考えられてきた。しかし「分身」には、明らかに、作者の明確な抵抗の姿勢が確認できる。確かに言論統制の影響らしく、表現は周到に控えてはいるものの、その奥に仕舞われた批判精神は、いまこそ読み解かれなければならないはずだ。⁽²⁴⁾

と論じている。

しかし、佐多自身は、この時期について、「レンのどうしようもない両国の血のおもいをたどることに、自分としての意欲を感じながらも、それ以上には出られず、低迷するしかなかった。しかも私自身が自嘲を意味にして「でろり」としていた」⁽²⁵⁾と述べている。「自分としての意欲」とは、「当時の日華事変を意識し、時勢への思いを日中の血を引く「混血児」レンに附託しようとしたところにあると考えられる。だが、「それ以上には出られず、低迷するしかなかった。」それに、「自嘲」という言葉を使っている。抵抗の姿勢を見せようとしても、最後までできなかった当時の揺らぐ心境を表しているのではないか。プロレタリア作家同盟が解散し、文学運動の足場を失い、言論統制の強化、戦争による閉塞感、夫の女性問題など困難な状況

にあつた佐多の動搖の姿勢は「分身」でも読み取ることができ
る。

佐多は、日本と中国両方の血を引くレンを、根本的には日本人であるという認識の上で描いている。物語中のレンは自分の中の「中国人」の部分について困惑を感じ、この「中国人」の部分で自分の「分身」として認識している。「混血」が植民地支配のために機能し、フィクションが「混血児」という設定を戦略的に利用する時代に、佐多もまさにその素材を扱っている。佐多はレンの「混血児」としての苦悩を描いたが、その苦悩の前提が「本来のレン」は日本人である、という点にあるということを考えて、当時の佐多の「抵抗の姿勢」と「批判精神」は揺らいでいたということができのではないだろうか。

【注記】

- 1 植民地旅行としては、一九四〇年六月から七月にかけて朝鮮を旅行、一九四一年六月に満州を旅行、一九四一年六月に満州旅行後再び朝鮮旅行、一九四二年三月から四月にかけて台湾を旅行している。戦地慰問としては、一九四一年九月に満州を、一九四二年五月末には中国を、一九四二年十月から一九四三年四月にかけてシンガポール、スマトラを訪れている。(『佐多稲子全集 第三卷』講談社、一九七八年二月、年譜参照)
- 2 『比較文化研究』No.114、二〇一四年十二月
- 3 武田麟太郎「女性作家の進出 ひたむきな芸術至上主義」『東京朝日新聞 文藝時評』一九三九年六月二十九日(『文藝時評大系 昭和篇I』ゆまに書房 第十六卷 二九五頁)。武田麟太郎「作品の中の「私」」矢田

- 津世子の「痴女抄録」『東京朝日新聞 文藝時評』一九三九年七月一日(『文藝時評大系 昭和篇I』ゆまに書房 第十六卷 二九八頁)。鬼頭史郎「作品月評」『文藝』一九三九年八月號 改造社 二一九頁。古谷綱武「文藝時評(3)」『嚴肅な條件』『都新聞』一九三九年九月二十八日(『文藝時評大系 昭和篇I』ゆまに書房 第十六卷 四〇一頁)。橋崎勤「十月の創作(3)」『北海タイムス』夕刊 一九三九年十月七日(『文藝時評大系 昭和篇I』ゆまに書房 第十六卷 四四五頁)。浦島太郎「作品月評」『文藝』一九三九年十一月號 改造社 二一九頁。
- 4 中野重治「解説」佐多稲子「樹々新緑」新潮社 一九四〇年十一月
 - 5 『佐多稲子全集 第三卷』講談社 一九七八年二月 三九八頁
前掲注 4
 - 7 さねとうけいしゅう『中国留學生史談』第一書房 一九八一年五月 一九二頁
 - 8 中村みどり「放蕩留學生と日本女性——『留東外史』及び『留東外史』『留東新史』について」『野草』二〇〇六年七七号 二二頁
前掲注 8 三四〇頁
 - 9 前掲注 8 三四〇頁
 - 10 前掲注 5 一七三頁
 - 11 前掲注 5
 - 12 波平勇夫「混血児の研究(一)」『沖大論叢』一九七〇年九号
 - 13 前掲注 12 九〇頁
 - 14 遠藤正敬「近代日本の植民地統治における国籍と戸籍満洲・朝鮮・台湾」明石書店 二〇一〇年三月 二二頁
 - 15 伊地知進「興亜的混血論」『改造』一九三九年三月号 八二頁
 - 16 「アジアの子」はシナリオの筋書きとして一九三八に『日本評論』の三

月号に発表されたので、一九四一年、「風雲」と改題し、佐藤春夫の中国に関わる短編集『風雲』に収録された。(童炳月『国民作家的立場中日現代文学関係の研究』三聯書店 二〇〇六年五月 「第三章 婚姻・生殖・亜洲共同体『亜細亜之子』の周辺」参照)

17 星名宏修「植民地の「混血児」——「内台結婚」の政治学」藤井省三・

黄英哲・垂水千恵『台湾の「大東亜戦争」』東京大学出版会 二〇〇二年
一二月 二七六頁

18 西村正男「日中混血のデイスクール」——鄭成功・鄭蘋如・李香蘭」松

浦恒雄・垂水千恵・廖炳恵・黄英哲『越境するテクスト 東アジア文化・文学の新しい試み』研文出版 二〇〇八年八月 九七頁

19 小森陽一・内藤千珠子「国性命合戦」と伝説の記憶」池田信雄・西中

村浩出版社 『間文化の言語態』東京大学出版会 二〇〇二年五月 参
照

20 黄鶯「外国人眼中的鄭成功」福建師範大学修士学位論文 二〇一一年七

月 参照

21 鳥居淳子「日本国籍の得喪における自由と平等(一)」(『成城法学』二〇〇二年(二号) には、既に指摘がある。

22 佐多稲子研究会『漂として立つ』菁柿堂 二〇一三年八月

23 矢澤美佐紀「抵抗の時代——「くれない」から「灰色の午後」に至る道」(前掲注21収録)

24 小林美恵子『分身』論——〈母〉を求める「分身」『国文日白』日本女子大学国語国文学会 二〇〇〇年三十九号 一二四頁

25 前掲注5

【付記】本稿は「第十回国際日本語教育・日本研究シンポジウム——変化する国際社会における課題と可能性」(二〇一四年十一月十六日)における口頭発表を基に執筆・修正したものである。ご教示を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

(九州大学院比較社会文化学府博士後期課程二年)